

ロールプレイ（3人制）による心理検査法の学習

障害児教育講座・山下 光

1. 授業の概要

この授業は，大学院教育学研究科特別支援教育専攻の特別支援教育コーディネーター専修，特別支援学校教育専修の合同授業である（後期開講）。登録受講生は19名であった。

「発達障害検査法演習I(吉松靖文准教授担当)」とともに発達障害児・者の心理アセスメントについて学ぶことを目的としている。また，前期に開講された「アセスメントの方法と計画」の応用・発展編的な性格を持っている。

特にこの発達障害検査法演習では，神経心理学的検査を中心に扱っている。特にルリアの神経心理学的研究を基礎として開発され，特別支援教育の現場で普及しているK-ABC（日本版K-ABC心理・教育アセスメントバッテリー）については15回中8回を充てて重点的に学習した。

その他には，統計学の基礎（測定水準，代表値と散布度，母集団と標本），テスト理論の基礎（信頼性と妥当性），神経心理学的検査の基礎理論，言語性記憶検査，非言語性記憶検査，遂行機能検査などを取り上げた。

テキストとしては，オリジナルのパワーポイント（プリントアウトの配布あり），「特別支援教育の理論と実践：概論・アセスメント」（金剛出版）を使用した。また，「文科系学生のための新統計学」（ナカニシヤ出版），「K-ABCアセスメントと指導解釈の進め方と指導の実際」（丸善メイツ），「K-ABCの実施・採点，解釈マニュアル」（丸善メイツ），「よくわかる失語症と高次脳機能障害」（永井書店）を参考書として指定した。

2. 今年度からの変更点

理論的な解説の後，2回にわたってロールプレイを実施した。このロールプレイは以前から実施していたが，通り一遍等なものになりがちで，受講

生の積極性が欠けるきらいがあった。

そこで今回から以下のようなやり方に改めることにした。まず，ロールプレイは基本的には3人1組で実施し，1人が被検児，1人が検査者役をつとめる。もう1名は観察者として，自分も被検児の回答の記録を取りながら，被検児役と検査者役の様子や態度で気づいたことを記録する。この役割は下位検査毎に交代する。

さらに，検査中に生じうるさまざまな問題行動や，質的な特徴を持った誤答を被検児役の受講生がシミュレーションすることによって，それに対する対処法や，記録法を工夫する試みを取り入れた。

一部の受講生はすでに前任校や実習でこの検査を体験していたが，それらの受講生には被検児役の時に，自分が実際に困った状況や実際の被検児でみられる特徴的な誤答を再現するように求めた。また，教員自身も被検児役として随時参加したり，被検児役の学生に指示を与えることによって特徴的な誤りや問題行動をシミュレーションさせた。

検査者役は，それらの問題に対してイーゼルの指示やマニュアルを参考に自分の判断で対処した後，3人での振り返り討議を行った。さらにそれを全体で討議し，合意を図った。その際，教員が即答できることに関しては回答を行ったが，すぐには答えられない場合もあり，後日この検査の実施経験が多い複数の臨床心理士，言語聴覚士にも意見を求めた。

ロールプレイの終了後は，ロールプレイで得られたデータについて採点，解釈を行った。その際にも個人での採点作業，解釈の後，グループ討議，全体討議の順でディスカッションを行った。

グループ討議で検査結果から推察される自分のグループの被検児の姿についてディスカッションしたあと，各グループの検査プロフィールを回覧し，

そこから読みとれる各グループの披検児の様子について予測を行った。その後各グループが自分たちの解釈を報告し、他のグループがそれにコメントした。

その後で、そのデータを市販の解釈プログラムによって解析し、グループディスカッションの結果と比較検討した。

また、WISC- とK-ABCが実施され、学業上の問題と行動上の問題に関する記録がある児童のデータを例示し、解釈と仮説の取舍選択についてディスカッションした。その際には、WISC- とK-ABCで共通性の高い課題（例えば、数唱や積木模様）に注目する必要性を強調した。

この授業の中で特に強調したのは、(1) いわゆる正常値には幅があること、(2) 単に正誤を × でデジタルにチェックするのではなく、後でエラーの性質の検討が可能になるよう披検児の反応をきちんと記録すること、(3) そのような質的記録を解釈に使用することの重要性とその際の注意点、等であった。また、同時処理尺度得点と継次処理尺度得点の乖離は健常児・者でも決して少なくないこと等についても説明した。

3. 授業の評価

授業最終日に実施したアンケートでは16名から回答が得られた。

「授業にはよく出席しましたか」という質問には、16名中14名が「はい」と回答した。実際にも出席率が2/3以下の受講生は1名のみであった。

「テキストは適切でしたか」という質問には、16名中13名が「はい」と回答した。しかし、「配布資料の量が多く整理が大変」「配布資料の体裁や大きさを揃えて欲しい（整理のため）」という意見・要望もあった。

「教員の説明はわかりやすかったか」という質問には11名が「はい」と回答した。「統計の部分がわかりにくかった」という趣旨の回答が3件あった。

「内容は難しかったですか」という質問には6名が「はい」と回答した。

「教員が熱意を持って取り組んでいるか」という質問には15名が「はい」と回答した。

「小テスト、レポート、試験などは適切でし

たか」という質問には14名が「はい」と回答した。

「学期全体での授業構成は適切でしたか」という質問には14名が「はい」と回答した。

「この授業があなたが知識を得るのに役立ちましたか」という質問には15名が「はい」と回答した。

「この授業を友人・後輩に勧めますか」という質問には15名が「はい」と回答した。

ロールプレイに関しては、全般的にリラックスした雰囲気と適度な緊張感が感じられ、前年度よりも活気のあるロールプレイとなった。

ある程度K-ABCの実施経験のある受講生には自分が実際に検査を行った際の問題点について意見や指導を受ける機会になり、また実施経験のない受講生はマニュアルには書かれていない問題点や、マニュアル通りに行かない場合の対応法などを学ぶことができた。

さらに観察者役を設定したことにより、検査中の検査者の検査の進め方や態度の問題を検査者にフィードバックすることができた。

心理検査の検査者は表情、うなずき、記録の仕方（手の動きや時間）によって無意識のうちに正誤のフィードバックを与えてしまっている場合があるが、それを指摘されるケースも少なくなかった。

アンケートの自由記述によれば、特に検査者役の時に「(披検児役の) 反応や態度に注意を向ける必要性を実感した」という趣旨の回答が多かった。「(被検児役の場合には) 今回のように演技的な要素が入った方が、自身の回答に関する抵抗感が小さく、やり易い」という声もあった。

しかし、「実際の子どもを使わない今回のようなやり方では、披検児の具体像を頭にうかべることが難しい」という欠点も指摘された。

また、アセスメントの結果を小中学校での教科等の具体的な指導へどう活かすかという展開に関しては、内容的にもまた時間的にも不十分な点があり、前期に実施した「アセスメントの方法と計画」や他の教員の授業との内容の調整も含め、今後改善の余地があると思われた。